

北京オリンピック報告

8月8日から23日まで中国・青島で開催された第29回オリンピック競技大会セーリング競技日本選手団活動について以下の通り報告します。

北京オリンピックセーリング競技日本選手団役員

役職	氏名	ADカード 取得者	オリンピック大会期間中の主な業務
団長	山崎 達光		JSAF 会長(8月11日～19日 青島現地駐在)
副団長	河野 博文		JSAF 副会長(8月8日～21日 青島現地駐在)
チームリーダー(GM)	山田 敏雄		フロント責任者として村外で渉外他、選手団管理統括
監督	中村 健次	○	村内、マリーナでのチーム統括および470男子コーチ、RSX男子コーチ補佐
コーチ	佐々木 共之	○	レーザー、49er コーチ
コーチ	宮野 幹弘	○	RS:X 男女コーチ、49erコーチ補佐
コーチ	小松 一憲	○	470女子チーム専任個人コーチ
コーチ	大庭 秀夫		村外にて団長付補佐およびGM補佐
コーチ	関 一人		村外にてGM補佐およびRS:X 男女コーチ
総務	斎藤愛子	○	村内、マリーナにてチーム総務全般、レーザー補佐、プロテスト通訳、気象潮流情報担当
トレーナー	水野 元晴	○	トレーナー (8/17～)柔道連盟からAD 資格を譲受)
広報	浅野 英武		広報業務進行管理・統括(前半現地駐在、後半国内)
栄養士	小澤 礼子		事前合宿時チーム帯同、会期時は国内および現地にて調理師対応

報告項目

1. アテネオリンピック以降北京大会までの強化策
2. 選手選考の経緯とオリンピック対策
3. 現地でのコンディショニング
4. 各種目毎のレース経緯と総評、反省
5. 北京オリンピック総括
6. ロンドンオリンピックへ向けての課題

1. アテネオリンピック以降北京大会までの強化策

2004年アテネオリンピック終了後、北京オリンピックにおいて「メダル獲得、複数種目入賞」を重点テーマに掲げ強化体制を構築した。

アテネでは470男子が銅メダルを獲得したが、メダル獲得の原動力になったのは企業チームがもつキャンペーン体制の「ノウハウが結実した結果」と分析しながらも、世界の強豪国に対抗していくためにはハード、ソフト両面において個々のチームの努力では限界にきているのではないかと考え、北京オリンピックへ向けては、選手の活動環境の整備を第一目標として掲げ、それを遂行できる「セーリングチームジャパン」として万全の組織力をつけていくことを主眼に置いた。

その中で、従来から独自に各チームが自チームコーチ等と共に行っていたそれぞれのチームの強化についても、引き続きその体制で継続実施する事も有効な手段と考えた。

目標達成のために多岐に渡る作業があることから、人的部分として五輪経験者及び国内トップクラスの新たな指導者を加え、組織的にも役割分担を明確にして責任を持ち、業務を推進することを主眼にマネジメント委員会、強化事業委員会、指導・評価委員会の3委員会を設置した。この組織編成は結果的には良い機能を生んだと考えている。3委員会の統括委員会会議を必要に応じ開催し、年度毎に重点テーマを委員会で確認、年度末に次年度に向けた反省会等を実施したことも一つの進歩であり、委員会組織は、歴代代表団と比しても遜色の無い形で運営されたと考える。

オリンピック前年度までは、各委員会が設定した重点テーマが全て完結できたとは言えないが、選手、コーチ間のミーティングも開催し、互いに課題や手法論を討議する場を設定し、「セーリングチームジャパン」としてテーマ達成に向けた数々の試みを実施した。

<具体的な実施事項>

(1) 選手活動環境の整備・充実

個々の努力で世界を目指していた環境を改善するために、物流と補助体制などマネジメントをチーム全体で連携することにより、選手のコスト負担を少なくすることが可能となった。JSAF本部の全面的支援のもと、選手が競技活動を円滑にできるように体制を整えることにも注力し、実力のある選手の受け入れ先を探し、可能性をもった選手が努力すれば目標達成ができるという環境整備を行った。また、ナショナルチームとしての合宿を増やし、個別コーチだけでなく、種目担当コーチが指導する体制を作り始めた。加えて企業チームからの人材が強化組織内部に入るようにし、チーム全体のレベルアップに努めるとともに種目別の横のつながりも強化し、オリンピック本番での団結力を作ることを目標とした。

(2) ランキングシステムの導入

経験値で判断していたオリンピッククラスの実力評価を改めるべく、国際的にトップレベルにいる470男女を強化重点の軸におき、国内で活動しているオリンピッククラス9種目に対して、そのクラスおよび選手の国際レベルでの力を参加艇数の違い、参加国数の違いなども考慮にいれながら、世界選手権の成績から判別するランキングシステムを構築し、メダルが狙える種目を見極めていくのに有効な手段と考えた。またランキングシステムの導入によって艇種別および個人別ランキングが明確となり海外遠征等における支援内容に反映する事が可能となった。

(3) 体調管理と栄養管理

個々にまかせていた体調管理については、JISSでのTSCチェック、運動能力の向上、怪我や

疲労に対するケア、栄養や水分補給などの体のコンディショニングにも着目し、年1回 JISS 合宿を行い、トレーナー、管理栄養士帯同によるナショナルチーム（以下 NT）としての講習を行った。こうした取り組みによって海上トレーニングだけでなく、フィットネスに対する選手の意識が変わるものと考えた。

2007年からは個々のチームに帯同するトレーナーだけでなく、チーム全体のトレーナー帯同を試みた。2007年の春の遠征、国粋のかかった世界選手権、オリンピック本番前の合宿、本番と時間をかけて準備を行った。

(4) アンチドーピング活動

アンチドーピング活動は、早くから ADAMS を導入し、NT 選手には JISS 講習時を利用して当該薬に関する指導を徹底した。これまではオリンピックに出場する選手レベルしかドーピングコントロールを理解していなかったが、これらの指導教育によって抜き打ち検査にも対応できる体制を整えた。

(5) 広報体制の充実

2005年より JSAF サイト内にオリ特HPを設け、情報を発信するようになった。レース関連のレポートは JSAF サイト、オリ特連絡事項はオリ特ページでという仕分けを行い、レース報告サイトと活動レポートを連動させて、幅広く情報が伝わるような仕組みを作った。

2007年より広報（メディア対応）の専任担当を置き、対メディアへの広報活動充実を図った。また、オフィシャルカメラマンを任命し、映像およびスチール写真を確保する試みを行った。これらの一連の広報活動の展開は、かつての選手強化体制の中では見られなかったものである。広報活動ではメディアに対して次の2点を重点項目として行った。

- ① 五輪セーリング競技の解説を丁寧に行うこと
- ② 代表となるセーリングアスリート達のひたむきさと人間的な魅力をアピールする

オリンピック活動をアピールしていくために、広島開催の470 第一次選考会からの記者会見開催、葉山開催のシングルハンド第一次選考会の記者会見、各種目の海外最終選考会のプレスリリースの発行、および JSAF 壮行会直前の共同記者会見などをきめ細かく展開し、さらにはメディア対象の「セーリング競技勉強会」も開催した。

また、取材の機会が増えることを考え、選手のメディア対応力（取材に対する受け答え等）を上げるため、専門講師を招聘してメディアトレーニングを実施した。

オリンピック期間中はレース日ごとのプレスリリース発行、また JSAF-WE B サイトにおける一般向けの「競技情報ニュース」と「ジャパンハウスニュース」の二本を随時発行した。

(6) プロテスト力の向上トレーニング

アテネオリンピック女子第1レースにおけるプロテストによる失格という苦い経験から、ルールのさらなる習熟をはかるとともに、英語によるプロテスト力向上を目的に、2006年 JISS 合宿時より3年間に渡り、青山篤 JSAF 常務理事夫妻、また大谷たかを氏の協力を得て実践講習会を実施した。海外でのプロテストに対する語学対応力を含め、オリ特作成「ルールガイドブック」

をNT選手に配布し、オリンピックを含め国際大会において活用した。

(7) 海外遠征の充実

アテネオリンピックの翌年は世界選手権のみの海外遠征であったが、2006年からは積極的にヨーロッパ遠征、オーストラリア遠征を実施し、国際大会参加を中心にプログラムを組んだ。また、大会が行われない期間は外地での強化合宿も実施した。

(8) 青島現地調査・準備

青島対策として、本番で吹く風や、レース海面のコンディションを事前に十分に時間をかけて調査した。2005年に最初の現地調査を行い、2006年はテストイベント、2007年には事前合宿とプレオリンピック期間の遠征、2008年は6月、7月と2回の合宿をへて、合計108日の現地練習を行った。

気象については、単に天気予報を準備するのではなく、イギリスチームの手法を基にして、選手に講習を通し考え方を説明、予報の見方や現場の風の傾向を解析した資料の説明をするようにした。

潮流については、2006年のテストイベントで、レース海域の複雑で速い流れを調査する必要性を痛感し、2007年にはセーリングチームスタッフで測定を行った。しかし系統だったまとめをしていくために、東京大学・大学院にプロジェクトチームの立ち上げを依頼、学術専門家の協力を仰ぐこととした。

2. 選手選考の経緯とオリンピック対策

(1) 選手選考の経緯

セーリングの11種目は種目ごとに国枠数が決まっており、そのうちの75%分はオリンピック全種目がそろった2007年のISAFワールド（ポルトガル・カスカイス）で割り当て、残りの25%が2008年のクラス別世界選手権で割り当てられた。

オリンピック特別委員会では選手選考基準を早めに公示したことで、選手達も選考会に対する準備・計画が立てられたと考える。

日本は2007年に470男女とRS:X男女が枠を獲得した。470男女は2007年11月に1次選考を行い、男子4、女子3艇が2次選考の2008年世界選手権（1月、オーストラリア）に参加し、両選考のポイントで近藤愛選手・鎌田奈緒子選手組（女子）、松永鉄也選手・上野太郎選手組（男子）を代表に決定した。RS:X男女は2008年世界選手権（1月、ニュージーランド）での最上位選手となった小菅寧子選手（女子）、富澤慎選手（男子）が代表となった。

2008年に持ちこしとなった残りの種目は世界選手権で国枠を獲得し、かつ日本選手最上位者を代表とし、49erは石橋頭選手・牧野幸雄選手組（1月、オーストラリア）、レーザーは飯島洋一選手（2月、オーストラリア）が獲得した。イングリッド、レーザーラジアル、スターの3種目は国枠を獲得できなかった。

今回のオリンピックには62ヶ国が参加、その内11種目、18名全ての参加枠を獲得した国は、開催国で全種目参加枠を与えられた中国を含めて5ヶ国（中国、フランス、イギリス、イタリア、アメリカ）のみで、国別参加選手総数で見ると、日本の9名参加は19番目にあたる。アジア地域予選等ではなく枠取りが2回の世界選手権で決まる中、日本のナショナルチーム選手達は頑張ったと言える。

《添付4. 国別参加選手数》参照

(2) オリンピック対策

ア. 気象情報の収集と分析

代表選手全員がオリンピック初出場であったが、青島は軽風域のコンディションが多く、潮流の流速が2ノットに達することを理解し、青島での勝ちパターンを考え、前述の通り潮流、天気について専門家の支援を受けて準備した。

7月合宿では潮流（東大チーム）と気象（岡本アドバイザー）にも参加をお願いし、毎朝、気象ミーティングを行うことで選手・スタッフ全員が青島の風を把握していくことを試みた。潮流については、コンピューターシミュレーションが予想以上の成果を出していたので、データを最終チェックしていく中で、選手に見せるデータをしぼりこみ、コーチの役割と選手への伝達を的確にできる手法を考えた。また、本番ではアテネ五輪でJOCの気象サポートをした気象海洋コンサルタント（馬場氏）が北京五輪を引き続きサポートすることになり、JOCサイトの中にセーリングチーム用の青島データを構築を依頼した。

イ. 事前合宿および現地入り

現地に慣れることを目的に6月下旬にはレーザーおよびRS:Xが、また7月10日から20日にはトレーニングパートナーを含め参加全種目の事前合宿を実施した。

その後、7月27日開村と同時に現地入りを果たし最終調整を行った。日本は470男女、RS:X男女ともに計測の順番が初日と2日目にあたる8月2、3日に当たってしまったこともあり、早いタイミングでの現地入りとなった。

ウ. 軽風対策とギアの改善

青島対策としては、全選手が減量し、適正体重維持に努力した。また、減量によって体力を落とさないためにトレーニングも工夫した。最終調整を通してRS:Xはパンピングに必要な体力と技術の向上、軽風での走りに取り組んだ。470はセール選択、艇の調整、現地でのレース練習（他国との合同レースの実施）、レーザーはダウンウィンドの走りと潮を考えたコース取りに重点をおき、49erは軽風でのスピードを追求したリグの選択とハンドリングを特に注意した。

470女子と49erは特に着用する衣類にも重量軽減を工夫し、49erではハーネスや衣類を交換することにより、強い風が吹いた日には不足する体重を補う作戦をたてた。

3. 現地でのコンディショニング

青島のセーリング会場はサテライト（分村）であったが、過去のオリンピックとは比較できないほど立地条件が良かった、特にオリンピックマリーナに選手村が隣接しているため、会場内に宿舎があり、一度中に入ってしまうと毎日セキュリティーチェックすら通らずに海へ出ることができた。ドリンクやサプリメントはマリーナ内へ持ち込むことが難しいのが通常のオリンピックであったが、今回は規制がゆるやかになり、1日中海へ出る競技としては、主催者が準備する競技場内での飲食物に制約されず、選択肢が増えてよかった。

ア. チームコンテナの設置

プレオリンピックの時から冷房設備の整ったチームコンテナ（40ft）を準備し、中では中型冷蔵庫が利用でき、飲食物の保存やマリーナ内での暑さ対策において大きな効果をもたらした。持参したエアロバイク2台はコンテナ内にスペースを作って設置し、レース後のクールダウンに選手が利用した。アテネオリンピックの時には4～5カ国しか用意していなかった居住タイプのコンテナだが、今回は22カ国が用意してきており、うち11カ国がプレオリンピックの時から準備をしていた。日本チームは7月合宿の時に居住コンテナの本番準備をしておいたため、大会期間中に必要な飲料、サプリメント等も大量に持ち込むことができた。

イ. 現地サポートの充実

今回、青島日本人会の大谷会長のご厚意で、マリーナが一望できるコンドミニウムの28Fに現地本部（Japan House）を設置することが出来た。現地本部は約200平米強の広さで、リビングルーム、2つのベッドルーム、キッチンそして食堂を有する立派なものであった。

現地本部には福岡から支援に来て頂いた「中村調理製菓学園」の調理師2名が常駐、希望選手への夕食を、また昼食のおにぎりを用意、スタッフが毎日マリーナへ運んだ。キッチンの広さから夕食の供給が選手に限られ、支援コーチ、村外役員まで及ばなかったことは残念であった。選手村の食事が油濃い中華料理が中心でダイエット中の選手には不評であり、諸外国の選手が外食を多くしていたことを考えると、現地本部での食事供給は大変有益であったと考える。連日献身的に調理に携わってくださった調理師2名には心から感謝を申し上げる次第である。

また、現地本部の寝室の一つをトレーナーズルームとして使用、夜には選手が体のケアが出来る体制をとった

青島は日本から近く、数多くの選手家族また応援団が来られ、本部には大会期間を通して延べ200名以上の方が訪問された。一般への本部開放時間を10:00-17:00に限定したために夕方以降に夕食を取る選手、トレーナーから体のケアを受ける選手に大きな支障はなかったと考えているが、選手が100%リラックスできる状況であったか否は検証が必要と考えている。

現地本部の開設により期間中に下痢になった選手が1名だけで、選手が大きく体調を崩すことなく、計測が始まった8月2日から3週間という長丁場を乗り切ることができた。今後の課題としては選手に関連する部分と外来者が居る部分をどの様に区分けするかを考えねばならない。

《別紙1. 管理栄養士 報告》

別紙2. トレーナー報告》 参照

4. 各種目の試合経過と総評、反省

(1) 各種目の試合経過と所見

・470 級男子

11日～18日、予定どおり10レースを行った。松永選手・上野選手組は第1レースで1位をとり、初日の2レース終了後に8位につけたことから勢いにのった。接戦で上位チームがアップダウンの多い中、最初から最後までマイペースでレースをこなした。総合成績を意識させず、1レース毎に集中させる事、一つ一つの積み重ねが結果になる事を意識させ、思いきりの良いレースを促したことが奏功した。メダルレースへの最後の1枠をめぐる争った第10レースが正念場であった。途中経過で日本か、ニュージーランドか、マークを回るたびに順位が入れ替わり、フィニッシュまでどちらが残るか分からない状況であった。結果、10位でメダルレースに進出を果たし、ダブルポイントでカットのできないメダルレースは思い切りのいい走りで2位を獲得、見事7位入賞へつながった。

両選手の精神的な強さはもとより、アテネ銅メダルに次いで470男子のオリンピック史上2番目の7位入賞は評価に値する。

オリンピック選考終了の2月以降、ヨーロッパ遠征を通じオリ特コーチと選手間の考え方、コミュニケーションのとり方に至るまで十分に確認し、限られた時間の中でどのように北京に臨むかについて綿密に話し合いを行った。選手・コーチ間でのすり合わせが詳細な点にいたるまで出来たことが、道具・コンディショニング等について迷うことなく明確に出来た一因だろう。また、この期間に最終選考まで競り合った石川、柳川（補欠）選手らが練習相手から雑用までのサポートに入ってくれたこともこの結果に大きな貢献を果たしたと考える。

・470 級女子

11-17日、金メダル候補にあげられ満を持して臨んだ近藤選手・鎌田選手組は、初日の2レースでイスラエルとイタリアからそれぞれプロテストをかけられ、2レースともペナルティターンを強いられた展開でペースを崩してしまった。普段起こらないことが起こったせいか、動揺が焦りへとかわり、2日目も立て直すことができなかった。3日目に第6レースで1位をとったが後が続かず、他国が軽風の的を絞り、さらにはヨーロッパでの大会を回避してまで現地青島で練習を重ねてきた戦略がスピードに現れていることに不安を感じ、自身らのアドバンテージがなくなったことから、自分達らしさを発揮できないまま10レースが終わった。戦いを終えた後の両選手の心情は「J-SAILING」誌上にて詳しく述べられているが、セーリング界こぞの期待を背に戦った両選手の重圧は計り知れない。

470級女子チームは所属企業のもと専任コーチを擁し完璧なまでのサポート体制を持っていたので、オリ特としては北京キャンペーンスタート当初から「メダル獲得を目指す」同チーム独自の活動を尊重し、代表決定後もその流れを壊さないことが「メダルへの近道」と考え、また同チームもそれを希望したため、最後までチームの自主性を優先することとした。

同チームは専属の男子トレーニングパートナーを伴って、豊富な練習量を武器にオリンピック準備に入った。2008年最終選考であるメルボルン世界選手権で弱点とされた精神面での弱さを克服するために、世界ランキングで1位になることを目標とし、積極的に海外レースに参戦、6月末に

はこの目標を達成することができ、その取り組みは間違っていなかったと考える。

しかし、上位国の「オリンピックで勝つための取り組み」は日本と異なり、6月前半から本番で使用する艇やセール調整を現地で行い、青島対策を万全に行うことに集中していた。結果、軽風でのパフォーマンスはあがり、スピード面で日本と並び、日本のアドバンテージは無くなってしまった。

果たして、結果はオリ特として悔いの残るものとなってしまった。

努力している選手達が必ず結果を残せるように、異なる視点から準備具合をチェック、また海外の強豪が取り入れているリスクマネジメントの手法を、今後日本のスタッフもコーチも考える必要があるのではないかと？ 470女子には最後まで代表を争った強力なNT選手達がいたが、軽風に強いそれら選手達の協力を仰ぐ練習計画を組んだり、オリンピックに向けての準備、調整の部分で北京対策（気象、道具など）の絞り込みに対する議論が同チーム専任コーチ、選手とオリ特の間で徹底して行うべきではなかったか？

オリンピック本番以前の大会からこうした話し合いを含め、十分なコミュニケーションを持ち、「勝つため」「勝たせるため」の努力を双方でおこなうべきではなかったのか？

次回への数々の教訓が残されたことを謙虚に認めたい。

・RS:X 級男子

11日～20日、10レースを行い、富沢選手は10位でメダルレースに進出した。苦手な中風域のレースでも1日2レースのうち1レースはシングルスコアをとってきたことでふんばりがきき見事メダルレースに進出した。とくにメダルレース進出をかけた第10レースの戦いぶりは圧巻であった。軽風で1レースの予定ということもあり、スタートからフィニッシュまで何も考えずにパンピングした。フィニッシュ手前でフランスを抜いて2位で入り、総合14位から10位へのジャンプアップは奇跡的にさえ思えた。入賞こそ逃したものの、富澤選手の10位はボードセーリング男子として過去最高の成績であり、次にメダルを狙える選手の誕生で、次回ロンドンへつながる貴重な実績となった。土壇場での勝負強さは今後に大きな期待を抱かせる楽しみな選手である。また、富沢選手の基礎体力、持久力はチーム1であり、世界のトップレベルに全くひけをとらないことも頼もしい。

加えるならば RS:X 男子については代表が決まってからディンギー種目のコーチがレースの組み立てを指導するようになり、レースに対する考え方がレベルアップした。また、補欠の上野選手のサポートから、技術とテクニックの細かい点を分析、整理し、取り入れて改善することができた。これらは、代表選考後に富沢選手が伸びた大きな要因である。

・RS:X 級女子

11日～19日、10レースを行った。小菅選手は軽風域で上位に入り、前半は10位以内につけていた。しかし、第6、7レースで10ノットオーバーの風で18位を2回とってしまい、最後までそのポイント差をつめることができず、僅かな点差でメダルレースに残ることができなかった。

小菅選手は現地プレ大会2回の経験から青島をよく考え、潮や風を研究し、少しでもレース展開に生かそうと努力をしてきた。本番ではスタートでの積極性が欠けていた事と、苦手な風域を克服

し切れなかった事が、目標としていた入賞に僅かに届かなかった原因と考えられる。

小菅選手は初参加の五輪のために、代表に決まってから本番にむけて、練習プランから資金面まで、自分で考えて決めることが難しい状態からスタートした。男子のプランとすり合わせながら練習を計画していったが、早い段階から綿密なプランニングがオリ特と選手との間でできていたなら、最後の追い込みで迷うことなくいけたのではないだろうか。代表決定まではコーチなしで練習してきた選手だけに、異なる環境で準備を始めるためには十分なコミュニケーションが次への大きな課題である

・49er 級

10日ー16日、予定より3レース少ない12レースを行った。石橋選手・牧野選手組は軽風域では3位以内に入るレースもあり、自己最高の成績をあげることができた。初日は第1レースでノルウェーに抗議を出し、2日目は第5レースで他国の抗議の証人となるなど審問室へ何度も通った。第10レースでは最終マークをトップで回ったものの、その時にレース運営艇がフィニッシュラインを作っていなかったために不利をこうむって6位まで落ちたことに対して救済の要求をおこなった。1位の得点がもらえれば10位でメダルレースに残れたので2時間の審問を粘ったが、結局救済は認められず、最終成績は12位となった。石橋選手・牧野選手組は基礎体力のあるチームで、470級から転向して短期間で49er を乗りこなした。リグ（艀装）をよく考え、軽風でのスピードを追求した。メダルレース進出こそ逃したが、代表に決まってからの6か月間で大きく伸びたチームであった。

担当コーチがADカード数の関係から本番では村内に入れなかったため、村内・村外での役割分担やサポート体制をスタッフが協力し、段取りやフィードバックを話し合う努力をした。それぞれが100%満足のいく仕事はできなかったかもしれないが、選手がベストなレースができたことは、今後、同じような状況のクラスができたときのケーススタディーになる。

石橋選手・牧野選手のサポートをしている江口トレーナーは、極少数で回していかなければならない競技現場の実情を理解し、ケア中心のアスレチックトレーナーと体力強化のフィジカルトレーナーの両方の役割を一人でこなした。セーリングにおいて艇を扱う体の動きからみて必要な筋肉、柔軟性、体の使い方などを考え、それらを強化していく手法を用いて49er チームの体づくりに取り組んだ。メンタルでの欠点を補うために独自の準備運動を導入して、平常心でスタートできるように指導し、石橋選手、牧野選手のアップダウンの違いを上手にコントロールすることに成功した。

弱い風に焦点を絞り、そこだけにかけてプランをたてた。吹いたレースは意に介さず、思惑とおりになった軽風のコンディションで成績を出せたことが12位という49er 過去最高の成績に繋がったと考える。

・レーザー級

12日ー18日、9レースを行った。順当にスケジュールをこなした470級と異なり、1日に1レースしかできなかった日もあったため、中盤からは予備日を使って毎日レースを行った。第3、4レースでは10位代をとり25位以内を目標にしたが、第6レースでスタート時の失格をとられ、

その後は焦りが出始め、42条の違反を2回目にとられて失格するなど、あつてはならないミスを買ってしまった。

イギリス代表を筆頭にほぼ全選手が軽風を意識し10kg近く減量をしてきていた。大会3ヶ月前の飯島選手は体重が軽いことを利点に軽風で良い走りをしていたが、ほとんどの参加選手が減量したため、すべり出しの早さで他選手との差がなくなりアドバンテージのない苦しい展開となった。

苦手としていたダウンウィンドの技術も克服し、特定の風域では15位以内を狙える力もついてきていたが、混戦でのポジション取りや、集団から抜け出す技術が欧州の選手と比べ、劣っていたことが敗因にあげられると思う。今回は青島の特有な条件から、現地事前練習を優先していったが、レース経験、戦術が必要なレーザーは、単独でも積極的に海外レースへ参加し、戦術についての経験を十二分に取得することが必要であり、レーザーにおいてはレース戦略の確立が急務である。

また、国際的にレーザーの強豪国はユースワールドから数々の世界大会をへて五輪代表へとステップアップし、20代前半で代表になってから2回目の五輪で目標達成をするサイクルができつつある。上位に入る選手の育成にはジュニア期から体格、運動能力のある選手を発掘し、長期プランで強化を行い、メダルを目指すことが必要と考える。

(2)レース総評と反省

「メダル獲得と複数種目の入賞」の目標をかかげたが、結果は470男子の7位入賞のみに終わった。この結果に対しては真摯に受け止めねばならない。一方、RS:X男女と49erは入賞まであと1歩のところまでできていたが、「複数の種目の入賞」という点については目標にわずかながら近づき、アテネ後の強化体制の基盤整備とあいまって、チーム全体の力が上がった事は確実である。

試合期間中は、男子についてはオリンピック代表のプレッシャーや成績に対する不安等、精神面で特に問題なく試合をこなしたことと比べ、女子の2種目はそれぞれに不安を抱え、その状況を克服する努力を行ったが全てを果たすことができなかった。こうしたことへの対策を持たずに臨んだ北京を反省し、今後は実力のある選手達がいつもの自分の力をきちんと発揮できるよう、女子のメンタル面強化に取り組む必要がある。

全体として反省すべきは「最終準備にとりかかるタイミングが遅すぎたこと」、残り6カ月のつめで、選手、スタッフ全員が「勝つための準備について十分なるコミュニケーションをとれる環境を作れなかった」ことである。

次回ロンドンでメダルを狙える選手達を育成していく上で、今回で得た数々の教訓を謙虚に受け止め、それらを糧として指導陣に徹底していかなければならない。

《添付 1. 北京オリンピック種目別成績

2. オリンピックにおける日本の成績推移

3. メダル獲得および8位以内入賞国》 参照

5. 北京オリンピック総括

(1) 総論

北京オリンピックに向けてオリ特が実施した新たな取り組み、アプローチの中で、選手への活動環境の整備とチーム組織作りの部分は強豪国なみに整えられた感がある。しかし、全体をみると多くのテーマに短期間で取り組んだため、すべてが十分に達成されていたわけではなく、ギアの開発や情報収集など、道半ばに終結した項目も数多い。

従来から独自に各チームが自チームコーチ等と共に行っていたそれぞれのチーム強化については、引き続きその体制で継続実施する事が有効な手段と考えてスタートした。そして、強化合宿等では基本を中心に全体の底上げを図った。しかしながら、最終目標であるオリンピックで勝利するための技術的レベルアップ面でのアプローチは、遅くとも2007年プレオリンピック参加時点から、個々のチームに任せるだけではなく、オリ特がチームジャパンとして推進する必要があったと考える。2008年6月事前合宿時点からは出来る限り推進したが遅すぎた感あり反省の一つである。

まさに限られた時間と人材での活動であり、重点テーマに優先順位をつけて絞りこみ、目標を確実に達成することが今後の課題である。

五輪で勝つためには、「戦うための作戦」が必要である。ロンドンに向けては、北京までに構築した「選手をサポートする環境」の中で、選手への指導内容、指導計画、オリ特としての4年計画、チーム方針をたてる必要がある。アテネ終了後は組織作りから始めたが、今回は幸いにもハード面の土台があるので、スタッフの役割を見直し、充実した現場での練習を経て国際レースへつなげていくソフト面作りに強化の主眼をおくべきではないだろうか。

北京五輪における日本の目標メダル総数の減少を含め、セーリング競技でのメダル獲得がなかったことで、JOC強化種目の評価、また強化費獲得面でも厳しい状況が予想され、そうなった場合のスリム化した組織、少数精鋭で結果を出すことも視野に入れておかなければならないと考える。

(2) 北京オリンピックの分析

ア. 選手団、役員決定

今回、代表選手が決定した時点では、本番の主軸スタッフ（監督、ヘッドコーチ、総務担当等）の人選やその役割分担が決まっておらず、オリ特と選手との間で細かいオリンピックまでの計画、打ち合わせが出来なかった。選手の計画は自らのチームのプランとのすり合わせになった。この点が今回の大きな反省である。

オリンピックチームの構築には、しっかりしたリーダーシップが必要で、代表選手全体をまとめる役割は大きい。今回は主軸スタッフの決定が6月に入ってからだったが、やり残したことや間に合わなかったことを考えると、セーリング連盟における五輪主軸スタッフの機関決定を遅くともプレオリンピック時までに決めることが勝利につながる道と考える。

実績を挙げた国は本番までのプログラムを持っていて、誰が代表になっても、その勝ちプランを実践している。今回も、日本代表が決まった時に、本番においてチームリーダーおよび監督となりチームの軸となるスタッフが、詳細にわたるプランを選手、コーチと打ち合わせし本番までの計画を実践することができていたなら、もっと良い結果が残せたのではないだろうか。

その点において今回は代表団監督にそうした環境をいち早く与えられなかったことは、オリ

特フロントおよびセーリング連盟の大きな反省点でもある。それが果たされていればより効率のよい練習、環境の整備とストレスの少ない遠征が可能であつたらうし、ましてや不安材料は確実に減っていたと思われる。

イ. AD カードの取得と役割分担

各競技団体に対する AD カード数は選手数の 30%との JOC の決りがあり、セーリングは 9 名の選手に対して 3 名が基本数であつた (9 名 × 30% = 2.7 ⇒ 3 名)。AD 数については会長、河野副会長はじめ JSAF 総力をあげて北京から離れた分村である事、またレース海面が複数に渡りそれらをサポートする必要性を強調した折衝の結果、青島枠として 2 枚の追加をまたアディショナルオフィシャルとして柔道競技終了後の 8 月 17 日から 1 枚追加の計 6 名が取得出来た事は成功であつたと考える。しかしながら村外役員を含めて一人が何役もこなさなければいけないオリンピックでそれぞれの役割分担を事前に決めてはいたが、もっと早い時期から詳細な業務を洗い出し、各々の業務内容の詰め、役割分担を明確にすべきであつたと考える。

またメディア対応についても、オリンピック本番では IOC の規定で AD カード保持者はメディア活動を禁止されている。従って、内部より一切レース経過等の情報を外部に発する事ができないため、村外役員が独自ルートにて情報を収集して外部に発信せねばならず、今回はそのほとんどを現地本部 (Japan House) で対応した。これについては選手村内の詳細な状況および選手個々のコメント等も聴取することが難しく苦勞をしいられた。きめ細かい広報サービス (対メディアも含めて) のためには村内と村外とのメディア対応への役割を事前にもっとしっかり詰めておくべきだったと痛感した。

ウ. 選手の活動環境の整備

以下の代表選手の活動環境の整備が行えた

- ① 代表チームとしてまとまった事前合宿を実施できた事は効果的であつた。海上練習、講習の受講はもとより、選手/コーチ/スタッフ関係者全てにとって団体生活を長期間過ごす準備としても有意義であつた。同じ空間を共有することで、それまで見えなかった人間関係、チーム事情を認識できることで日本チームとしての方針、対策、準備の時間を作ることができた。これらの対策 / 準備ができた艇種については成果が表れ、有効であつた。
- ② 栄養管理面において JSAF 賛助会員である日東ベスト (株) 現地法人である日本食堂「月山」の協力を得て事前合宿時は昼食、夕食の供給を、また本番時は食材調達が出来、選手/スタッフの体調管理の維持が順調に出きたと感じる。特に昼食のデリバリーは疎かになりがちな海外での海上栄養補給に有効であつた。またこれら栄養管理についてのアドバイザーとして、小澤栄養士に担当していただけたことは従来からの経緯を把握されていたこと、競技特性を理解されていたことも有りコーチへの負担もなく、安心した状況下で合宿を過ごせた。今後も継続したアドバイスのもと、合宿・海外遠征等の環境整備をお願いしたい。
- ③ 事前練習期間の使用ハーバーについては、利便性が良く大会前の練習環境としては非常に良いものとなった。中国において有効な合宿を行える環境を整備できた背景にはマネジメン

ト委員会の数年前からの準備に加え、正確な情報収集、現地との交渉、現地協力者の確保が出来たこと等が大きな要因であったと感じた。

- ④ 大会の重点項目に潮流/気象があり、これについての準備が想像以上にできていたと感じる。東大チームの学術能力の高さがこれほどまでとわかっていたならば、もっと早い時期から協力を依頼するべきだったと残念に思った。1年前に情報が整っていたならば、シュミレーションが実施でき、その上で日本チームとしての戦術、方針について専門家、コーチ、選手と討議できたと感じる。

エ. 情報収集とその活用

昨今、情報戦略が問われるスポーツ界で、競技の勝負以外での情報収集は重要な課題であり、日本チームの状況は以下の通りであった。

- ① セールやマスト、艇の選択が許される470においては、各パーツ/セールの開発等、テクノロジーの活用等が選手、スタッフ、専門家とで共通認識として情報共有できていなかったことは今後の課題である。艇の建造側と選手の間で理解が異なる点も多かった。
- ② 49er は選手、コーチと艇の販売業者が綿密な打ち合わせを行い、コーチが海外での艇の建造に立ち会うことも叶い、納得のいく準備ができた。
- ③ RSX はオリンピックタイプのボードの供給のタイミングについて熱心に情報収集を行い、輸入元にも協力をしてもらって準備をすることができた。選手はその情報を元に練習計画や事前合宿の際のプランをたてることが出来た。
- ④ プロテストの際にブラジルコーチがPCへ録画した実況中継の持ち込みがあった。プロテストへの画像の持ち込みは強みがあるので、今後、事前準備の重要課題としたい。
- ⑤ 気象データについては、絞り込みをかけて選手に使える情報のみを提供するようにした。事前合宿では毎朝説明をしておき、本番は1枚の紙に情報を集約した。必要な人には見られるように天気図など、希望するものを用意した。予報がはずれても、あまり驚くことがなかったのは、毎日の天気の原因がみえていたからではないだろうか。プログラムとしては完成されてきたので、次期オリンピックを目指すユースから導入して行くべきと考える。
- ⑥ 潮流については、東大プロジェクトチームが作成してくれたコンピューターシュミレーションプログラムから必要な時間帯の潮流チャート、流速チャートを印刷し、パウチにして各コーチに渡した。コーチはそれにコース線を重ねて、その日の風向と潮流の変化とがわかりやすいように選手とシュミレーションを行った。この手法は最後の3か月で仕上げたものであったが、非常に有効であり、ロンドンオリンピックでも引き続き取り組む必要がある。予想以上のプログラムが短期でできてきたので、逆に選手への説明がおいつかなかった。代表選手達の潮流を考えたレースストラテジーの理解度はゼロに近いところからスタートしたが、時間をかけて取り組んでくれたチームにはそれなりの成果を出すことができた。

(3)成績上位国がオリンピックに対して取り組んでいた事項

今回のオリンピックで好成績をあげた強豪国の取り組み、特徴を整理すると以下の通りである

- ア. オリンピックに向けての準備（期間・特徴）
- イ. スタッフの役割分担（人数、AD数、特徴）
- ウ. 組織力（まとめ、リーダーシップ等）
- エ. 目標設定（技術面、青島対策）
- オ. 情報戦略（気象、ルール、他国分析）
- カ. 代表選手（連続出場、本命選手のメダル獲得）
- キ. 資金面（規模、スタッフ・選手への補助）
- ク. 代表選考（時期、選考後の取組み等）
- ケ. 精神＜メンタル＞（初参加、男女）
- コ. 2012年の可能性

***日本を含めた詳細な分析・対比は別紙参照**

6. ロンドンに向けての課題

次期新体制は北京オリンピックに向けてのオリ特の取組みや実施した各事項の検証を行い、また、反省事項を活かし、かつ前述の強豪国との比較分析を参考にして、ロンドンに向けての強化事業計画を立案・推進する時点で、以下の取組みを行うことが望ましいと考える。

(1) 最終目標に向けての計画

ア. 最終目標から逆算した計画立案

最終目標から逆算した日程の立て方、専任スタッフが確実に仕事をしていくことが必要ではないかと考える。

ロンドンへ向けてはオリ特専任スタッフが中心となり、最初から4年計画、最後のアプローチへと積み上げていく仕組みを確立することを大きな目標とするべきである。

2008年12月にはISAFワールドカップが始まり、2011年の12月にはオーストラリアのパスで国枠獲得のISAFワールドも行われる。また、その前に2010年にはアジア大会があり、ここでは前回シンガポールに惨敗した結果を繰り返してはならないし、全種目メダルをを目指す強化をすぐに始めることをしなければならない。同じ年にはシンガポールで第1回IOCユースオリンピックも開催されことでもあり、次世代を担う選手の育成・強化も並行して行わねばならない。

計画をたてた上で、目標設定、試合、評価という繰り返しができるようにしていく。これはNT選手だけでなく、ジュニア世代から教えていくことが、次のチームとしての課題ではないだろうか。

今回参加した選手(4年後も継続予定選手)と新たな選手との指導内容の調整も必要と考える。また、次世代選手の育成については別途対策を検討するとして、強化スタッフ主導の基、選手育成を行う部分と選手(チーム)の自己責任で強化する部分と分けられる必要があると考える。選手(チーム)に任せると、野放し状態となり甘えが出てしまうことが多く、特にメンタル面での強化にマイナスとなる傾向があり、ある程度、合宿等での規律、メンタル強化、フィットネス強化が必要と考える。合宿メニューはセーリング中心でなく、4年間のスパンを活用し幅広い能力向上メニューが必要。従来から栄養、ルール、気象、トレーナビリティ、及びトレーニング方法等を実施しているが、より高いレベルを目指して内容の見直しと改善が必要である。

イ. 具体的な実施項目

- ① 次世代選手達の把握と分析のために、和歌山ナショナルトレーニングセンターを中核に強化活動の拠点をいくつかにしぼり、選手の活動を把握していくためにネットワークを作る。
(JISS、NTC 中核拠点の利用も含む)
- ② 選考によりNT選手を選抜し、世界選手権での上位を目指すために強化する。強化合宿と海外遠征だけでなく、自主的に集まって練習をする体制も整える。
- ③ アジア大会のジュニアクラス、ユース五輪に参加資格をもつ年代の選手の発掘と代表選手を指導する人材を確保する
- ⑤ セーリングの競技ランクをあげるために重点種目をトップ選手で固めて国際レースで結果を

出す

- ⑤ Weymouth（ロンドンオリンピック会場）の気象データを蓄積し、Weymouth で勝てる選手を強化育成する
- ⑥ オリンピック国粋予選が行われるパースにて2010年に合宿を行い、粋取り準備を万全にする。パースの特殊なコンディションに慣れ、徹底した強風対策を行う。（特にボートハンドリング）
- ⑦ 英国チームとコミュニケーションがとれる関係を築き、Weymouth でNT 合同合宿を組む。本番準備に必要な情報を得るためのネットワークを構築する。
- ⑧ JISS の分析・解析サポートなどを利用して、種目別に動作解析を行い、実際のセーリングにつながるトレーニング方法を構築する。（フィジカルトレーナーとアスレチックトレーナーの連携）
- ⑨ 構築したトレーニング方法を選手が実践し、進歩の具合をチェックするシステムを作る。
- ⑩ 海外コーチ・トップレベルの選手の招聘合宿を行う。
- ⑪ 次世代を狙うジュニア/ユースの育成と強化（別添資料）を推進する

（2）ロンドンオリンピック選手団主要役員の早期決定

繰り返しになるが、遅くとも2011年プレオリンピック時にロンドンオリンピック主軸スタッフ（監督、ヘッドコーチ、総務担当等）を決定すべきと考える

プレオリンピックは本番会場の準備としては同じ季節に行える最後の機会であり、チームジャパンとして参加する。その体制でパースにおける国粋獲得に挑戦すべきと考える。

（3）代表選手選考方法・基準の早期公示

遅くとも2011年10月までには公示し、選手達が選考会に対する準備・計画が立てられる様にすべきと考える。

（4）オリ特組織・体制

北京オリンピックでの成績を踏まえ、4年後を見据えた体制を整備する必要がある。
また北京オリンピックに向けプロジェクトを組み挑戦した各選手のレポートを参考にロンドンに向けた施策を組む必要があり、現オリ特3委員会を継続、また充実、推進する過程で委員会毎の業務を整理する必要があると考える。

以上

ご協賛スポンサー一覧

今回の長期にわたる北京オリンピックキャンペーン展開にあたって、企業・団体・個人の皆様から多大なご支援・ご協力を賜りました。無事北京オリンピックを終えることが出来ましたのもまさにその賜物です。ここに、ご助力いただきました多くの企業・団体・個人の皆様のお名前を掲載させていただき、深甚なる謝意に代えさせていただきます。

(敬称略)

アサヒビール (株)	中村調理製菓専門学校
アビームコンサルティング (株)	日東ベスト (株)
伊藤超短波 (株)	(株) 日本航空
エスビー食品 (株)、	日本水産 (株)
大塚製薬 (株)	(株) ノースセール・ジャパン
小田急ヨットクラブ	ぴあ (株)
カシオ計算機 (株)	B・N・P パリバ証券
関東自動車工業 (株)	フォーティファイブ・アールピーエム・スタジオ (株)
キャノン (株)	ミズノ (株)
医療法人 健育会	三菱レイヨン (株)
国立スポーツ科学センター情報科学部	(株) ヤクルト
(株) ゴールドウイン	ヤマザキナビスコ (株)
(株) ジェイ・ウイル・パートナーズ	山本光学 (株)
JFE ホールディング (株)	ヤンマー船用システム (株)
(株) シバソク	ヤンマー (株)
(株) 商船三井	ラジエ工業 (株)
商船三井ロジスティクス (株)	
MOL Logistic(Netherlands)B. V	青島日本人会
ソニー (株)	青島日本人学校
中部瓦斯 (株)	三菱商事 (青島) 有限公司
(株) 坪川アソシエイツ	月山
医療法人 天宣会	朝日緑源有限公司
(株) 東京ニュース通信社	キャノン (株) 青島支店
東大潮流調査チーム	(株) 日本航空青島支店
巴工業 (株)	(株) ヤクルト青島支店
(株) 虎屋	
(株) トーヨーアサノ	岡本治朗
トヨタ自動車 (株)	岡田勇氣
Toyota Motor Europe NV/SA	馬場正彦